CROSSROAD-SERIES

魔法少女リリカルなのは

～碧緑の風そよぐ～

霧野知秋

サークル・クロスロード

魔法少女リリカルなのは
～碧緑の風そよぐ～

霧野知秋

サークル・クロスロード

碧緑の風そよぐ

イラスト／はざましゅんいち

長い旅の果てにたどり着いた約束の地。
暖かな主の懐（ふところ）に抱かれ、初めて味わった幸せ。
でも、それは仮初（かりそめ）の幻だった。
主を喪い、仲間を喪い、ただ一人取り残された自分。
絶望に沈み、心を閉ざし、全てを投げ出そうとする私を繋ぎ止めたのは、たった一つの希望。
『魔法少女リリカルなのはShote Story's』はじまります。

1

第九七管理外世界――地球。
ミッドチルダを中心とする時空世界との公の交流は今もって開かれていないこの世界だが、以前より少なからぬ人間が両者を行き来していたらしく、ミッドチルダにも地球由来の料理や風習が多く伝わっている。
特に最近では戦技教導隊のエース・オブ・エース――高町なのは二等空尉の出身世界として、管理局内だけでなく広く一般にもその名が知られるようになりつつあった。
時空暦六二年の現在、様々な経緯の末、地球にはリンディ・ハラオウン提督らが在住し、非公式ながらも管理局の出先機関としての役割を果たしていた。
が――
「無惨ね……これは」
時空管理局本局――
中央指揮所で先の事件の後始末に追われていたレティ・ロウラン提督は、報告書を見ると眉をひそめた。

報告書には、先に起こったヴォルケンリッターの影たちによる襲撃事案により管理局が受けた損害が記されている。
死者、行方不明者は数十人。要塞とうたわれた本局の中心区画は半壊。更に地球との転送ポートも破壊され、事件直後から連絡が取れなくなっていた。
「で、どういうことなのかしら？」
レティは報告書から目を離すと、モニタの向こうを見た。そこにはまだ若い管理局員が一人立っていた。
『は、はい』
その局員は緊張した声でうなずくと、
『時空標準時一三〇九三〇、転送ポート修復のため、第九七管理外世界に向かった部隊との交信が途絶。交信の回復を図ると共に偵察隊を派遣するも……』
「その偵察隊とも交信が途絶したと――」
『はい』
局員はうなずく。
『複数の手段を用いて交信の回復を図っていますが、現在に至るも交信は回復できていません』
「交信できない状況にあるのか、それとも……」
レティは目を瞑ると考える。

（どういうこと――）
先の事件で転送ポートが破壊された直後のこの状況。今だ地球にいるはずのリンディたちとは連絡が付かず、更に地球に向かった局員たちの相次ぐ行方不明。
どう考えても何かが起こったとしか思えない。
レティは手元のコンソールに現在の本局の復旧状況と、時空航行部隊の展開状況を映し出す。
ヴォルケンリッターの影たちの事件を受け、本局は各地に展開している部隊を呼び戻した。
彼らは本局の警備と復旧に加え、事件の背後関係の調査に充てられている。
時空世界の要である時空管理局本局で起こったこの失態。早急に解決せねば、時空世界そのものに大きな動揺を与えることになる。
レティ自身も、ヴォルケンリッターの上司として、また事件発生時に中央指揮所で指揮を執っていたことから、査問会への召喚の噂も出ていた。
幸い、主犯であるヴォルケンリッターの影が撃退されたことと、三提督らがレティを擁護してくれているため、今のところ大きな動きにはなっていない。
だが、だからこそ今、管理外世界との連絡途絶などという些事に投入できる戦力はないのだ。
（けど――）
地球との連絡途絶。明らかにこの一連の事件と関係がある。
レティの勘がそう警鐘を鳴らしている。

特に向こうにいるはずのリンディとの連絡が取れないのが、非常に気になる。
リンディ・ハラオウン提督は、現在は実戦の場に立つことはないとはいえ、限りなくS級に近いAAA級の魔導師。それに彼女の下には管理局随一の情報処理官であるエイミィ・リミエッタもいるのだ。
「本当ならばなのはさんに行ってもらうところだけど……」
高町なのは二等空尉は、フェイト・T・ハラオウン執務官と共にリンカーコアが損傷し、医務室に入室中。また、ヴォルケンリッターの一人――シグナム三等空尉も、自らの影と戦い重傷を負っている。
双方共に命に関わる重傷ではないのが幸いだが、今目の前の事案には投入できない。
レティは眼鏡を外すと、軽く眉間を揉む。
「となると、やっぱり彼しかいないか――」
結論を出したレティは、再びモニタに目をやると管理局員に指示を出す。
「あなたは現在位置で待機。状況に変化があればすぐに報告を」
『了解。ですが――』
「分かってます。然るべき応援部隊を派遣するわ」
『了解しました』

「……で、我々に調査を依頼したいと」
時空航行艦〈アースラ〉の艦橋。クロノ・ハラオウン提督補佐は、渋面を浮かべながらモニタの向こうのレティに答えた。
「確かに今すぐにでも地球に向かいたいところではあるのですが」
クロノは言葉を濁す。
母親と同僚との連絡が途絶えているのだ。
任務に私情を挟まないクロノとはいえ、やはり地球の動向は気になる。
でも、今時空管理局は猫の手も借りたいほど人手の足りない状態だ。この状況で本局を離れるのは、時空管理局の高級士官として許されるものではない。
〈アースラ〉自身も、不測の事態に備え、本局に近い時空世界のパトロール任務に就いている。
ここで別任務に就くとなると、艦船の運用計画を一から見直さなければならなくなる。
運用計画部の同僚の怨嗟の声が聞こえてきそうだ。
だがレティはクロノの内心をはかったように、
『分かってるわ。でも、私はこの事件の核はあの世界に――地球にあると睨んでいるの』
「地球に――ですか？」
『ええ。ヴォルケンリッターの影たちの本局襲撃。それに伴う地球との転送ポートの破壊。そ

して地球との通信途絶。偶然にしてはあまりにも符合が整いすぎているわ。むしろ、地球と我々との通信を遮断することが目的なのかも……』

レティの言葉にクロノは眉をひそめる。

「提督はこの事件の背後に繋がりがあると――」

『そう考えるのが自然じゃなくて』

レティがうなずく。

時空管理局本局を襲撃する目的を持った組織。

かつて跳梁跋扈していた時空海賊たちが、三提督らの力により壊滅した今、それを行う必要があるのは一つしか残されていない。

「反時空管理局組織――」

そう答えたクロノの声は掠れていた。

「しかし彼らは管理局の総力を上げた掃討戦で、大幅に力を削がれたと聞きます。もしも提督の言葉が本当だとしたら、彼らは相当な準備を持ってこの作戦を開始したはず」

『ええ、そうね』

レティの声は硬い。

「もしその推測が正しいのならば、我々〈アースラ〉の派遣などではなく、管理局全体をもって掃討作戦を展開する必要があるのではないでしょうか？」

クロノは直言する。

本局を襲われ動揺が広がる中、反時空管理局組織の存在とその行動を一般市民に知らせる訳には行かない。もしも管理局の威信に傷がついたなら、そのときは管理局の崩壊の序章になりかねないからだ。

『もちろん、提督会議に上申はしたわ。でも却下された』

「なぜです――」

クロノは思わず声を上げた。

『反時空管理局組織に対する全面的な作戦行動を取れば、彼らの脅威を時空管理局が認めたことに他ならない――それが提督会議の結論よ』

「そんな馬鹿な。もしもこの事件が彼らの仕業だとすれば、彼らの最終的な目的は時空管理世界の崩壊に他ならないんですよ。提督会議は彼らを甘く見すぎではないですか」

レティはかぶりを振ると、

『仕方がないわ。今のはあくまでも状況に基づく推論にしか過ぎないのだから』

絶句するクロノ。

『だからこそ、あなたたちに調査を依頼したいのよ。提督会議が納得するような確かな証拠を得てほしいの』

「で、地球にですか――」

『ええ。もしかしたら他の管理外世界にも動きがあるかもしれないけど、今確実に何かが進行しているのはあそこだけよ』
レティの瞳がクロノを見据える。
数秒の沈黙。
クロノは小さくうなずくと、
「分かりました。お引き受けします」
と告げた。
『ありがとう、クロノ。あなたならそう言ってくれると思ったわ』
レティの表情が和らいだ。
『今、命令書を送付したわ。現在時を持って時空航行艦〈アースラ〉は、クロノ・ハラオウン提督指揮の下、第九七管理外世界――現地名「地球」の調査行動に移れ』
転送されてきた命令書の文面を確かめると、「了解しました」とクロノは敬礼を交わした。
『ああ、それと――』
通信を終えようとしたクロノをレティが呼び止める。
「なんでしょう？」
『八神一等陸尉とヴォルケンリッターを〈アースラ〉に区処（くしょ）します。うまく使ってやって頂戴』
「はやてとヴォルケンリッターを？　しかし――」

ヴォルケンリッターの将であるシグナムは重傷を負い入室中。また、他のメンバーも自らの影と戦い大きなダメージを受けている。戦力として数えるには、いささか不安なメンバーだ。
『彼らを今、本局に置いておくのはあまりいい判断ではないわ。ほとぼりの冷めるまで出来れば遠ざけておきたいのよ』
クロノの不満を読み取ったのか、レティが付け加える。
「そう言うことでしたら――」
『お願いね。クロノ』
レティはそうつぶやくと、通信が切れた。
クロノは一時、艦長席に身体を預けると、すぐに身体を起こし、
「全艦に通達。〈アースラ〉は新たな任務に就くため、現在地点を離脱する。本局にて補給を受けた後、第九七管理外世界の調査任務に従事する」
そう告げるとブリッジを見回し、
「航海、進路変更三三〇」
「進路変更三三〇、アイ――」
大きく船体を揺らし回頭する〈アースラ〉。
ひとしきりの加速の後、その姿は時空の狭間に消えた。